

世界を知る
学校

07

平和のための「紛争」論

世界各地で起こり続ける戦争や紛争。その背景には、「経済のグローバル化」が「戦争と紛争のグローバル化」を誘因しているという事実があります。そして紛争の原因や登場するアクターはますます見えにくく、複雑化しています。一方、「平和構築」「紛争予防」「人道介入」などの言葉とともに、巨額のカネが動き、ビジネス市場化しているのも現実。民族や宗教などの違いや対立が紛争を生みだしているのでしょうか？メディアはそこに生きる人びとの視点から紛争を伝えているのでしょうか？紛争を歴史と現在の国際政治の側面から考え、その解決に向けて考えます。

- 2010年5月～2011年1月 ● 基本的に隔週月曜日 19:00～21:00
- 全15回/定員30名 ● 受講料38,000円

5/17

グローバル化と現代の紛争

—アフガン以後の「多層化する世界」を読み解く

進藤 榮一（筑波大学大学院名誉教授 / 早稲田大学アジア研究機構構成員
教授 / 日本新技術促進機構会長）

日米安保50年、冷戦後20年、現代紛争の本質はどう変わったのか変わらないのか。多層化する世界の中で、紛争とテロリズムの意味と構造を、極からでなく非極の視座からとらえ直しアフガン以後の世界を俯瞰し、東アジア共同体を展望します。

●主著：『国際政策』日本経済評論社 2010（近刊） / 『アメリカ・黄昏の帝国』岩波新書 1994 ●参考文献：進藤榮一『現代国際関係学』有斐閣 2001 / 進藤榮一『東アジア共同体をどうつくるか』ちくま新書 2007



5/31

ジャーナリズムは紛争を止められるか

—現場から見たメディアの課題

志葉 玲（ジャーナリスト）

多くの場合、戦争 / 紛争では、それを始める者達による情報操作が伴う。ジャーナリズムにおいて最も重要な仕事は、いかに情報操作とたたかい、暴力の歯止めになるかだろう。

●主著：『たたかう！ジャーナリスト宣言—ボクの見た本当の戦争』社会批評社 2007 / 『ガザ通信』（写真）青土社 2009 ●参考文献：同上



6/14

対テロ戦争の失敗

—アフガニスタン、イラク、パレスチナの戦争の現場から

谷山博史（日本国際ボランティアセンター（JVC）代表理事）

アフガン、イラクで対テロ戦争はなぜ失敗したのか。日本は戦争に関与することで何を失ったのか。日本政府と市民がなすべきことは何か。紛争を理解することが平和の鍵です。



6/28

先進国の青写真では描けぬもの

—アフガン復興支援の26年

福元満治（ベンチャーフォーラム会事務局長）

紛争地の人々が望むのは「治安の安定」と「雇用」です。それは軍事力では達成できません。私たちは、診療所をつくり、用水路を建設することで、それを実践してきました。

●主著：『伏流の思考—私のアフガンノート 増補版』石風社 2009 ●参考文献：中村哲『医者用水路を拓く—アフガンの大地から世界の虚構に挑む』石風社 2007 / 高橋修（編著）『アフガン農業支援奮闘記』石風社 2010



7/12

アフリカの紛争はどこから来たか

—植民地化からポスト冷戦まで

武内進一（JICA 研究所 上席研究員）

アフリカの紛争はなぜ起こるのでしょうか。植民地化以降アフリカの国家や民族が経験した変化を手がかりに、この間いについて考えます。

●主著：『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009 / 『戦争と平和の間—紛争勃発後のアフリカと国際社会』（編）日本貿易振興機構アジア経済研究所 2008 ●参考文献：武内進一『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』 / 白戸圭一『ルゴ 資源大陸アフリカ—暴力が結ぶ貧困と繁栄』東洋経済新報社 2009



7/31（土）14:00～17:00

映画を観る

占領下におけるジェンダー・人権・女たちの生き方

—パレスチナとつながる回路を求めて

『Women in Struggle 一目線』（監督：ブサイナ・ホーリー / パレスチナ / 56分 / 2004 / 日本語版 DVD 販売・貸出：連連影展（FAV）

岡 真理（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

異邦の難民キャンプで、占領下で、あるいは完全封鎖のもとで、それでもなおお生き続けようとするパレスチナの女性たちの姿を通して、人権と、私たちの責務について考えます。



●主著：『アラブ 祈りとしての文学』みすず書房 2008 / 『栗椰子の木陰で 第三世界フェミニズムと文学の力』青土社 2006 ●参考文献：サラ・ロイ『ホロコーストからガザへ—パレスチナの政治経済学』（訳書）青土社 2009 / WISEC（編）『Women in Struggle— 一目線—パレスチナ 占領・ジェンダー・人権を考える』WISEC 2008

（23「ドキュメンタリー映画と語るう！」クラスと合同）

8/30

エネルギー資源争奪戦とパワーゲーム

岩間剛一（和光大学経済経営学部教授 経済学科長）

世界経済が回復基調にある中、中国、インドをはじめとした新興経済発展諸国は再び高度経済成長を始め、国内の急増するエネルギー需要を賄うために、資源国に対して政府と国営企業が一体となって、熾烈な資源争奪戦を展開している。そうした国際エネルギー情勢の現状と今後の動向をやさしく解説する。

●主著：『ガソリン 本当の値段—石油高騰から始まる“食の危機”』アスキー新書 2007 / 『石油がわかれば世界が読める』（共著）朝日新書 2008 ●参考文献：岩間剛一『資源開発プロジェクトの経済工学と環境問題』とりい書房 2004



9月（日程調整中）

映画を観る

“占領”に蝕まれる加害国の社会

—元イスラエル将兵の証言から

『沈黙を破る』（監督：土井敏邦 / 日本 / 130分 / 2009 / 配給：シグロ）

土井敏邦（ジャーナリスト）

パレスチナ報道には被害だけではなく、加害者側の論理、実情をも伝える必要がある。さらにそこから日本を含めた他国も内包する“普遍的な問題の本質”を引き出したい。

●主著：『現地ルゴ / パレスチナの声、イスラエルの声』岩波書店 2004 / 『アメリカのユダヤ人』岩波新書 1991 ●参考文献：土井敏邦『沈黙を破る』岩波書店 2008 / ドキュメンタリー DVD『沈黙を破る』（2010年3月発売予定）

（23「ドキュメンタリー映画と語るう！」クラスと合同）



10/7（木）

対北朝鮮・「拉致」問題解決への道のり

蓮池 透（北朝鮮による拉致被害者家族連絡会〈家族会〉元副代表）

長い膠着状態にある日朝関係。大きな外交問題に発展してしまった拉致問題。解決のためには感情論ではなく、複眼的に日朝の歴史を俯瞰しその中の一つの問題として拉致をとらえていくしかありません。

●主著：『拉致—左右の垣根を超えた闘いへ』かもがわ出版 2009 / 『拉致対論』（共著）太田出版 2009

（17「どうなる!? 政権交代後のニッポンの政治」クラスと合同）



10/15（金）【予定】

見えない慢性的な紛争とどう向きあえるか

下澤 嶽（国際協力 NGO センター（JANIC）事務局長）

平和構築といわれる領域は、「国際社会で話題性があり、ほぼ解決しつつある紛争」だけをとりあげる傾向があります。小規模で慢性的な紛争は「不干渉」を理由に放置されており、そうした紛争に市民はどうかわることができるのかを考えていきます。

●主著：『チッタゴン丘陵白書 バングラデシュ、チッタゴン丘陵地帯の先住民族 紛争・人権・開発・土地問題 2003～2006』ジュー・ネット 2007 / 『開発 NGO とパートナーシップ—南の自立と北の役割』コモンズ 2007



11/1

紛争の現場における NGO の役割

井上礼子（パルシック代表理事）

スリランカで2006年から2009年5月までの間に武力紛争で亡くなったり傷を負ったりした人々の数はしれない。同じアジアの日本で、政府も市民社会もそれを止めるために何ができたかを考えると無力感に襲われるが、それでも、この経験の中から何かを学びたい。

●著書：『徹底解剖 100円ショップ』（共著）コモンズ 2004 / 『日本のフェアトレード』（共著）明石書店 2008 ●参考文献：アヌラー・W. マニケー『熱い紅茶—現代アジアの女性作家秀作シリーズ』（訳書）段々社 1995



11/15

自衛隊は海外で何をしているのか

—カンボジア PKO からイラク戦地派遣まで

半田 滋（東京新聞編集委員）

自衛隊の将来について、自衛隊が活動しやすいよう改憲すればよいという人もいます。「戦争をしない日本」を誇りに思い、憲法9条の枠内での活動を求める人もいます。あなたは、どう考えますか。

●主著：『「戦地」派遣—変わる自衛隊』岩波新書 2009 / 『自衛隊 vs. 北朝鮮』新潮新書 2003 ●参考文献：半田滋『「戦地」派遣—変わる自衛隊』岩波新書 2009 / 半田滋『聞えない軍隊 肥大化する自衛隊の苦悶』講談社+α新書 2005



11/29

アジアにおける安全保障体制と日本政府の役割

犬塚直史（民主党参議院議員）

貧困や紛争に直面する国々に対する真の国際平和協力活動とは何か。自衛隊派兵の是非とは？ ODA 政策のあり方は？ 人間の安全保障という考えに基づき、日本の政治・政策のあるべき姿をお話いただきます。



12/13

平和はつくれるか

伊勢崎賢治（東京外国語大学総合国際学研究院教授）

「平和」に対する考え方は、僕自身、毎日“揺れて”います。今考えていることは、講義当時に変わっているかもしれません。自分に正直な講義をさせていただきます。先入観無しのままさらな状態でおいで下さい。よって、この講義にあたって、僕の著書や参考文献は載せません。

●主著：それでもご興味のある方は、アマゾンで検索ください。



1/17

戦争の終わりが平和ではない

—もうひとつの「紛争解決論」

中村尚司（パルシック理事）

平和は、戦争の双子の兄弟である。昔も今も、軍事力の行使により相手を倒すことが戦争であれば、軍事力の行使により相手を抑圧するのが平和である。

●主著：『地域自立の経済学』日本評論社 1998 / 『人びとのアジア—国際学の視座から』岩波新書 1986 ●参考文献：Social Development and Conflict Resolution as Seen by an Unauthodox Economist, AFRASIA Working Paper, Ryukoku University, 2009

